

●二人で味わう古典和歌(57)

今日はもし人もやわれを思ひ出づるわれも常より人の恋しき

永福門院

『風雅和歌集』「恋」の一首。

「今日はもしかしたら、あの人もわたしのことを思い出しているのではないかしら。わたしも、いつもよりあの人  
のことが恋しい」。

古典和歌の恋というと、やたらに思いつめて悶々としたり、むやみに落胆して消え入らんばかりになったりする場合が多いが、この歌の心はまことにふくよか。永福門院らしい品位ある大らかさ、そしてどこか新しい時代を感じさせる恋の歌である。

本歌は藤原俊成のこの歌。

今日はもし君もや訪ふとながむれどまだ跡あともなき庭の雪かな  
『新古今和歌集』

「今日はひよっとして、君が訪ねてくれるかも知れない  
と思ってしみじみ眺めるけれど、まだだれの足跡もない庭



の雪だなあ」。

師走の雪の深い朝、甥の藤原実定へ贈った歌という。なるほど、俊成の歌にしては、くつろいだ感じである。この実定という人、詩歌管弦に優れ、俊成とは親しかったらしいが、少々よからぬ逸話も残している。

『徒然草』第十段。住居について語られるなか、後徳大寺大臣じのおとど(実定)が、邸やしきの正殿に鶯を止らせまいとして縄を張っていたのを西行が見て、鶯が止ろうと何の不都合があるろうか、この人の心はこの程度のものか、と非難したというくだりがある。昔から地位のある人にはゴシップがついてまわったのだ。などと俗なことを言っていると、永福門院に微笑みながらたしなめられそうだ。

永福門院は、十八歳で当時二十四歳の伏見天皇の後宮に入り、帝とともに『玉葉集』『風雅集』の清新な歌風を担った。貴族文化が最後の輝きを放った鎌倉後期。定家らの拓いた新古今の新風がしだいに形骸化してゆくなかで、むしろ近代的とも思われる独自の表現を見せた。まことに颯爽とした中宮である。  
(小島ゆかり)